

所見も無之事也。今按るに中華の禮に或は軍敗れし其時、或は國亡びて降り服したる時は、必素幡を建る事あり。我朝の昔も如此ありける。景行天皇の本紀に、周芳國の魁師が素幡建しとあるも、神功皇后の本紀に、新羅國王の素旆を擧しとあるも、欽明天皇の本紀に、新羅の大將の白旗を擧しとあるも皆其事也。されば昔は旗幟の類に、素色をば不用と見えたり。然るを將軍の出征の時に、白旗を賜る事ありなど、云は心得ぬ事也。却て忌さけ可申事也。盛衰記の頃平氏は赤色を捧げ、八幡殿の家には白色を捧げ、刑部殿の家には黑色を捧ぐなどいふ落書の事あり。刑部殿は義家の弟刑部丞義光の事なれば、源氏とて皆白色を用しにても無之證據也。白石話

一、鏝直垂の事

鏝の字矢の幹のこと、意得て、白鏝、漆鏝など云は誤りなるべし。鏝は矢の幹に造る竹の名也。羽壺うづを空穂とするも如何。羽の字を以て矢の事とするは、左氏等にも見えたり。羽壺に作て可也。鏝直垂の事古代には無之事也。保元の時事を記せる人車記に、高松殿に武士を召集らる。平清

盛水干・小袴・紫革威鏝、頼盛・教盛・重盛同じく武装を備へて相従ふ。源義朝赤地の錦の水干・小袴、頼政以下各思ひく、多くは紺の水干・小袴、或は生絹・皆鏝に折烏帽子・臈充・革貫を着、童僕胡箆を負て冑を持。とあり。然るに保元物語に、義朝此時赤地の錦の直垂に、折烏帽子引立て、脇立ばかりに大刀を佩くとあり。異本にも、赤地の錦の鏝直垂。とあり。其比は水干・小袴を物具の下に着たるをば、鏝直垂と云しにや、後三年記の繪に見るは皆水干の製に不異。

一、甘露降りて竹林枯敗す

觀寧六年冬。建昌軍城北五里間。甘露降于進士徐上交別業松上。濃潤如酒澤。其味甜香。上交折松枝獻于太守張子方。時有野人賣藥于市。語人曰。吾嘗客華陰縣。民亦有以甘露降告縣者。令因自出按之。有道人笑曰。譬如人身精液流通均布六七十年中。若其壽短促。則涌迸於末死之前矣。此木蓋將枯故耳。官人不信。請留我以待明春。此松必不復榮矣。縣令如其說。果驗焉。見事文類聚卷四

近年西京・東都皆竹樹等に甘露降り、纏綿家は歌を詠で賀

之、東都の儒家は詩を裁して祝之しぬ。或は殿上に宴を設け、或は萬歳を唱て相例す。其後天下に聞えし竹林皆悉く枯敗し、遠僻の地に至る迄皆然り。凡俗中にはゆる大名竹といふ竹は、天下擧て亡失しぬ。淡竹の種類は無異變也。鳩巢先生嘗て謂らく、大象來ると甘露の降ると兩事には、某終に一詩句をも不下候と被申候。曲學阿世の輩可寒心事也。

一、道林禪師と白居易の問答

杭州道林禪師。初至秦望山見長松枝葉蟠屈如蓋。遂棲止其上。復有鵲巢其側。人目爲鵲巢和尚。太守白居易入山曰。師住處甚危險。師曰太守危險尤甚。曰。弟子位鎮山河。何險之有。曰。心火相交。識性不停。得非險乎。又聞佛法大意。師曰。諸惡莫作。衆善奉行。白曰。三歲孩兒也解恁麼道。師曰三歲孩兒雖道得。八十老人行不得。事文類聚三十五卷

一、歎乃の音

歎乃曲上音讀祝穆按次山集歎乃曲。注云。歎音襖乃音靄。節歌聲。洪駒父詩話謂。歎音靄乃音襖。遂反其音。朱文公亦用此音。必有所據。

一、孕婦、胎兒を失ひし奇談

元文元年秋七月、我公東都に述職たり。小姓番頭高山善左衛門從て東行す。八月二十三日善左衛門妾小讀大炊給人何某が女也四五歳、懷孕既に十一月に成て腹痛し、産の催しと見ゆ。仍之穩婆及び醫師魚住道徹等を招きぬ。醫婆いまだ不至、哺時に臨て其孕婦忽に失たり。學家大に驚き、男女相集て搜索すれども家内には不見。日暮て提灯を以て土藏を見るに亦不見。二階に人の苦しむ聲聞えぬ。仍之二階に登りみれば、什器の間に孕婦伏て在りぬ。正氣無之に付蘇香圓用ひて心氣もつき自ら云。安産し男兒を得たりしが、何もの共なく其兒は取て行くと覺えて、其外の事は不覺と云。先づ家内の常居の所へつれ來りぬ。醫師・穩婆も來り診し、昨日迄の胎氣とは大に違ひ常婦とひとし。然共出産のしるしは聊無之、衣服に穢血もなく胎氣の散じたる迄也。是日風雨甚敷く終日通宵、目さすともなき事なるに、孕婦土藏に在しに衣裳少しも不霑、手足に泥土の痕もなし。至て怪敷き事故、道徹も斷申入れ薬も不用候。世間風説迄にては難信候故、高山婦齋藤三左衛門は近所故相尋ね候處、右の趣申